

# AVAC CLUB

AUDIO & VISUAL MAGAZINE

2000  
**10**  
VOL.13

注目のプログレッシブ

## 最新DVDプレーヤー徹底視聴!

DVD プレーヤーは新しい時代に突入した。

ドルビー・ラボラトリーズ社の  
次なる戦略とサラウンドにかける夢

朝沼予史宏のホンネTALK

マルチプログラム時代をスポーティーに快走するAVアンブ

Hide McQueen's DISC EXPRESS

「戦争のはらわた」登場!ならば、ペキンパーについて

鈴木新次郎のエキサイティングホームシアター

マニュアルだけでは分からなかった Handling Report

●リスニング&シアタールーム訪問 ●From AVAC Shop情報 ●タケシのAV鑑賞室





取材/ドルビーラボラトリーズインターナショナルサービスインク社にて  
左:技術戦略マネージャー 松浦亮氏 右:日本担当副社長 伏木雅昭氏

# ドルビーの次なる戦略とサラウンドにかける夢

AVファンにとってドルビーという名は知らぬわけにはいかないものだ。なぜなら、DVDで映画を観ようと思ったらドルビーデジタルという方式を避けては通れないからだ。ドルデジとDTSどちらが好きかなんて議論はさておき、映画のサラウンドのロジックを確立し、われわれがサラウンドを楽しむ環境の礎を築いたドルビー社に敬意を表し、日本担当副社長伏木氏と技術戦略マネージャー松浦氏に話を伺った。

## ドルビーデジタルはこうして標準フォーマットとなった

ドルビー・ラボラトリーズ社は、アメリカ合衆国のサンフランシスコにあり、全世界の総社員数が550名程度、日本支社の社員は9名という。誰でも知る知名度の割には大企業とはいえないそんな規模の会社が世界のオーディオや映画界で非常に大きな影響力を持ち続けている。ドルビー社を創始したのはレイ・ドルビー氏。アメリカ人だが、イギリスのケンブリッジ大学を出て、1965年にイギリスでドルビー・ラボラトリーズを設立した。アメリカのサンフランシスコに移ったのは'76年だ。



本社/サンフランシスコ



Ray Dolby氏(現会長)

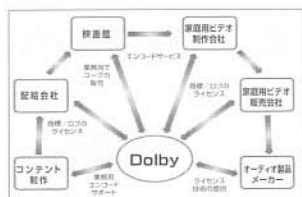
ドルビーと言えばまず、ノイズリダクション。テープのヒスノイズを低減するための技術「ドルビー・ノイズリダクション・システム」を知らない者はないだろう。最初はドルビーAタイプが録音の現場で使われた。民生用機器では'70年にドルビーBタイプが、カセットテープの録音・再生用に実用化された。以後'80年にCタイプ、'90年にSタイプが登場して進化を遂げた。いっぽう映画の世界でも最初はノイズリダクションから始まった。'71年に公開されたキューブリック監督の「時計仕掛けのオレンジ」ではプリミックスとマスターにAタイプが使われた。上映用フィルムでは、'75年の「リストマニア」の光学式トラックに採用されたのが最初だ。サラウンド方式の研究も同時に行われ、2つのトラックに4トラック分の信号を記録する、「ドルビーステレオ」サラウンド方式が初めて採用された映画は「スター誕生」。1976年に公開されている。その翌年公開の「スターウォーズ」[未知との遭遇]の2作品によって、ドルビーステレオに対す

る一般の知名度は決定的に高まった。以後は映画ではドルビーSR、家庭用ではドルビー・プロロジックを経て、1992年に映画で5.1chドルビー・デジタルが登場する。

サラウンドというと圧縮技術が不可欠になるのだが、ノイズリダクションと圧縮というのはじつは、非常に概念的に近いところがある。どちらも「限られたレンジの中でいかに良い音を得るか」という意味で共通なのだ。だからノイズリダクションのドルビーがサラウンドのドルビーに変身できたのだ。

ドルビー社の考え方のもうひとつの重要な部分は、『広い視野』だ。ユーザーのターゲットや技術の応用性を限定せず、幅広く、より多くの人に利用してもらいたいという考えのもと、サラウンドに関しても単なる『圧縮技術』の応用という狭い枠ではなく、システムまわりをどう構築するか、ということに常に意識が払われている。その証拠に、ドルビーのサラウンドは5.1chのスピーカーが揃っていないと聞けば聴けないサラウンドではなく、5.1chの場合と同様に2本のスピーカーだけでも楽しめるサラウンドとして実現されていて、マニアだけでなく一般の人が安心してすぐに聴け

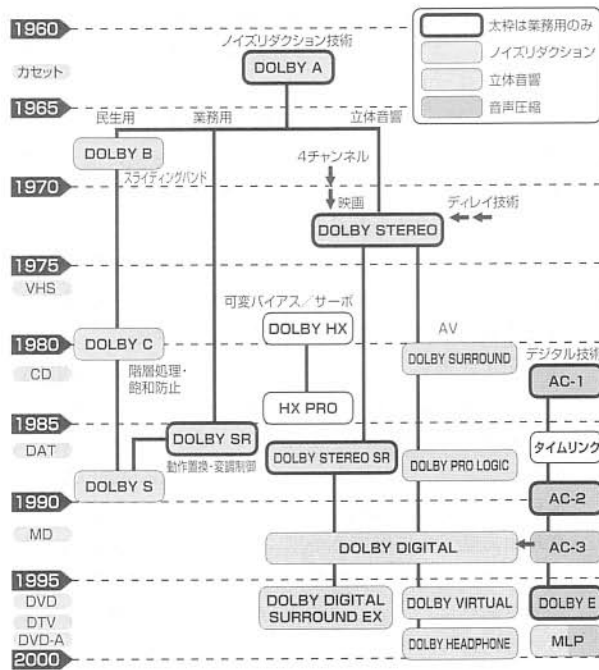
ることが非常に大切にされている。サラウンドの究極を極めたいマニアから何も知識のない一般のユーザーまで、幅広い人に同じように楽しんでもらえるフォーマットを作るという、もっとも難しい課題を見事にクリアしている。だからこそ、ここまで世界普遍のシステムとして受け入れられてきたのだ。そもそもサラウンド・システムの使いこなしのロジックはドルビー社が培ってきたものであり、たとえばDTSのようなサラウンド・フォーマットも、ドルビーのノウハウがあったからこそ成り立っているとと言っても過言ではないだろう。ちなみに、家庭用パッケージソフトではDTSの音の方が良いと言う人が多いが、これはミックス・バランスやマスタリングの違いによるところが大きく、フォーマットとしての優劣はほとんどないと考えた方がよい。圧縮率の違いも、一概に音質の優劣に結びつけることはできない。



業務の流れ



業績の内訳



ドルビー技術年表